

25. 介護老人保健施設を拠点とした地域福祉推進の実証的研究

－鷹峯地域のニーズに焦点を当てて－

- 大森 俊次（介護老人保健施設「がくさい」事務部長（岩田貞昭氏後任））
- 藤林 通代（京都市北区地域介護予防推進センター・副センター長）
- 西田 奈央（京都市北区社会福祉協議会・総合職員）
- 河本 歩美（京都市西院老人ディサービスセンター・所長）
- 南 多恵子（京都光華女子大学健康科学部医療福祉学科社会福祉専攻・講師）

1. 目的

社会福祉施設は、従来から地域社会における重要な社会資源の1つとしての機能や役割を担ってきた背景がある。2000年の社会福祉法施行以降は、地域福祉の担い手として積極的な地域貢献への期待がより一層もたれるようになった。しかし実際には、地域福祉活動の取り組みは法人や施設によって格差が生じており、地域住民のニーズに応える実践をあらゆる施設が展開していくことは現代的課題といえる。

研究代表者の大森が所属する介護老人保健施設「がくさい」（以下、老健「がくさい」）は、地域福祉推進に寄与するため、従来から様々な取り組みに着手、展開してきた。例えば、立地する鷹峯地域の祭りや運動会への参加、京都市北区内の障害者施設の利用者に働き場を提供したカフェ事業などである。だが、多くの施設がそうであるように、老健「がくさい」でも、これまでのプログラムは職員サイドの発案からスタートしたものが多く、住民ニーズ発の取り組みという意味では弱い側面があった。

社会福祉施設として目指すべき地域福祉推進とは、地域との双方向の関係性の中から、住民ニーズに立脚したプログラムを実施することにある。住民ニーズを汲み上げ、そこから施設が実現可能な活動を生み出していくプロセスを、この研究を通じて具体化していきたい。

そこで鷹峯地域の全面的な協力を得て、普段関わりのある一部の住民に限らず、幅広く住民ニーズをアンケート及びヒアリングで収集する。また、先行事例からヒントも得た上で、当事者の声に即した魅力ある地域福祉活動のプログラムを立案・実施する。最終的には報告書とし、広く関係者にも知ってもらうことで、社会福祉施設と地域との連携による地域福祉推進の普及に貢献したい。

2. 方法

本研究は、老健「がくさい」を拠点とした地域福祉推進の可能性を広げていくために、(1) 鷹峯地域の住民を対象としたアンケート調査、(2) アンケート調査に基づくヒアリング調査、(3) リサーチ・チームによる調査結果の整理・分析及びプログラムの立案・運営、(4) 住民ニーズに基づいたプログラムの実施と検証、(5) 先行事例のリサーチ、(6) 報告書を作成し、関係者へ広く配布、というプロセスで実施する。

(1)では、老健「がくさい」の立地する鷹峯地域の住民に対しアンケート調査を実施し、施設に対する住民ニーズにはどのようなものがあるか、広く声を拾う。普段施設に関わりがない方からも潜在的に持っているニーズを引き出すことを狙いとする。(2)では、アンケート結果による住民ニーズを概ねまとめた項目に焦点を当て、直接意見を収集するためヒアリングを行う。(3)では、(1)と(2)の結果の整理・分析を行い、住民ニーズに立脚したプログラムを立案する。(4)では、実際にプログラムを実施する。(5)では、複数の法人が“面”的に連携し、地域ニーズに関わるという先駆的展開をしている「あいとう福祉モール(東近江市)」へ赴き訪問調査を行う。(6)では、報告書を作成し、関係者に配布することで、社会福祉施設における地域福祉推進に広く貢献したい。

3. 鷹峯地域の住民を対象としたアンケート調査

<概要>

アンケート実施期間 2013年12月10日～2014年3月15日

アンケート協力先 すこやか学級(介護予防を目的とした教室参加者)、女性会、びよびよサロン(子育て中の保護者)、町内会長の諸氏

アンケート回収数 全65通

アンケート項目 鷹峯学区において、老健「がくさい」の印象・イメージについて、老健「がくさい」と現在の地域との関わりについて、老健「がくさい」と、これからの地域との関わりについて、地域住民からの意見・要望

<調査結果>

調査に協力くださった方の年齢は60歳代18名、70歳代36名とその年代が大半を占める。もう少し多世代の声を拾いたかったが、調査期間中、子育て世代の住民が集まる場“びよびよサロン”の開催回数が少なく、依頼できる人数に限界があった。したがって、ここで取り上げる住民の声の多くは高齢世代ということになった。

調査結果の概略は次のとおりである。

1)「鷹峯学区について」は、回答者の多くが50代～70代の方であることを反映してか、①坂道が多くて大変、②公共交通機関が限られる、③買い物が不便、大変であるという意見が多かった。

2)『老健「がくさい」について』は、老健「がくさい」があることを知らない住民はほぼいなかったが、どのような機能を持つ施設なのか? どのような専門職がいるのか? という問いについては、半数ほどが“詳しくは知らない”という回答であった。

3)『老健「がくさい」の印象・イメージについて』は、まず、来所経験を尋ねると“行ったことがない”が14名、“行ったことがある”が49名であった。次に、一般的に、“高齢者入所施設”と聞いてどのようなイメージを持つか尋ねたところ、“いつか利用する可能性のあるところ”が19名で、あとは明確なイメージが上がってこなかった。しかし、老健「がくさ

い」のイメージを尋ねると、“明るい” 32 名、“信頼できる” 26 名、“いつか利用する可能性のあるところ” 28 名と、施設関係者からすればありがたい結果が出た。10 年間、地域に開かれた施設を目指して推進してきた成果かと願いたい。

4) 『老健「がくさい」と現在の地域との関わりについて』では、会議室や喫茶を住民も活用できる点を尋ねた。すると、老健「がくさいを知っているか？」という質問は大半の方が知っているとの回答であったが、その利用方法となると知らない声も大幅に増えた。また、老健「がくさい」があることで安心感があるかどうかという問いには、“大いにある” が 47 名、“少しはある” が 17 名、“特別感じない” が 6 名と、施設の存在が普段の安心感につながっていることがわかった。

5) 『老健「がくさい」と、これからの地域との関わりについて』では、まず、ボランティアへの関心を尋ねると約半数が関心を持たれていた。特に多かったのは、話し相手、行事の手伝い、園芸であった。福祉専門職を活用した取り組みでは、“認知症の勉強会” “もしもの時に仕える介護保険活用術” に希望が集中した。その他、より多くの住民に貢献できる方法として、イベント開催、貸し会場、喫茶への出入りを活発化することが挙げられた。

6) 『地域の皆さんからご意見ご要望』では自由筆記で多くの意見が挙げられた。ここでは、今回の調査では割合が少なく、大きな声として上がってこなかった子育て世代と思われる人からの意見を特記しておく。「鷹峯学区は現在、積極的な子育て支援が少ないと感じています。坂道が多く、交通手段の不便さの中で、若い親は仕事を持っている中でストレスが多いのではないのでしょうか？ 行政からの子育て支援はもっと他の支援策団体と連携して、お互いの団体が生かされた施設へと発展していけるのではないのでしょうか。この地区にある塾に通う目的は進学のためのもので、ボランティア大学生との「学びの場」を施設として提供していただけるのはいかがでしょうか？」「地域の働く親の負担を軽くする（残業等にも対応出来るので）京都市ファミリーサポートセンターとの連携」など、具体的な意見が寄せられている。

4. 鷹峯地域の住民を対象としたヒアリング調査

- ・日時 2014 年 7 月～8 月
- ・対象 地域住民の方 11 名にヒアリングを実施
- ・項目 アンケート結果を受けて、『老健「がくさい」の広報』『幅広い人たちに老健「がくさい」を知ってもらう工夫・方法』『喫茶の活用法』『介護保険について知りたいこと』『鷹峯住民にとって必要と思われる取り組み』をお聞きした。
- ・主な意見
 - ▶ディケアの送迎車が地域の中を走っているのをよく目にする。ディケアの職員が当事者家族に対し PR する（広報）。
 - ▶地域の集まりに職員が出てきていることがとても重要（老健「がくさい」を知ってもらう）。
 - ▶元気なお年寄りに講師になってもらい講座を開く（老健「がくさい」を知ってもらう）。
 - ▶参加したくなるような取り組みをしないと人は来ない。例えば、喫茶で何かをする小さな組

織を作る（喫茶の活用法）。

- ▶住民にとって専門用語がわかりにくい。わかりやすく話してもらおう講座。入所手続き、費用、サービス内容が知りたい（介護保険）。
- ▶イベント企画は単独では難しい。内容、対象者によって、地域団体とコラボさせることが重要（鷹峯住民にとっての取り組み）。

5. プログラム企画立案・運営

- ・日時 2014年9月20日（土）9:30～12:00
- ・対象 地域住民21名
- ・内容 「もしもの時の介護保険活用術」という住民ニーズを受けて講座開催(図1参照)
- ・参加者の声
 - *介護保険についての説明が聞きたかったので、良い機会を頂き、ありがとうございました
 - *外から見てはわからない施設の中身が見られて良かった。

など

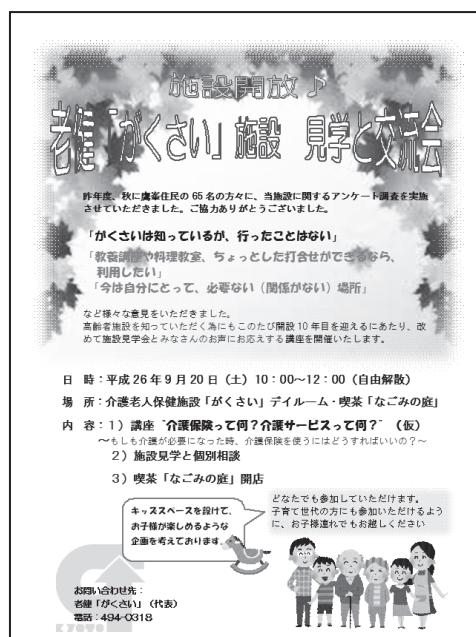


図1 9/20 企画チラシ

6. 先行事例の視察

- ・日時 2014年11月4日（金）10:00～12:00
- ・対象 あいとう福祉モール
- ・内容 あいとう福祉モールの概要、複数法人が協働して“面”的に地域福祉を推進している様子を視察した。

7. 報告書の作成

本研究の成果は、社会福祉施設における地域福祉推進の実態と意義を広く周知するため、報告書を2,000部発行し、地域住民や社会福祉施設・団体、社会福祉協議会等にも配布する。

8. まとめ

アンケート調査から、過去10年間、地域に開かれた施設であろうと様々な取り組みを行ってきた結果、老健「がくさい」を肯定的に捉えている意見が多かった。実際に、アンケート、ヒアリングの中で、「今のままで十分」「がくさいはよくやってくれている」という声も多く聞かれ、時に前のめりに地域に溶け込もうと取り組んできた諸事業の手ごたえを感じる事ができた。

だが、これまでは施設サイドからの一方向的な展開であり、せっかく取り組んだ今回の調査や視察での意見や成果をいかに反映していくのか？ が重要である。その1つとして、今回、住民の声に多かった「もしもの時のため、介護保険をもっとわかりやすく知りたい」という声に応え、

実際に企画を試行した。これは、アンケート結果からも『老健「がくさい」があることは知っているが、事業内容や在籍する専門職のこととなるとあまり知らない』という声もあり、介護保険のことを解説する講座と見学会、そして喫茶での会食をセットにしたものである。これは、小さな一歩だが、今回得た住民のニーズに応えるプログラムを今後も増やしていきたい。

なお、老健の特性から、どうしても地域住民対象の取り組みも高齢者中心になりがちであり、多世代へ目を向けた展開をどうするのか？ は課題である。その際、老健のみでは難しい点もある。そこで必要なのは、例えば、北区社会福祉協議会と連携し地域にある多領域の施設同士のつながりを創り、“オール鷹峯”でこの地域をよくしていく動きを生み出していけば非常に効果的ではないか。鷹峯には、保育園や児童館、障害者施設、小学校、また少し足を延ばせば大学もある。様々な社会資源が手を携えて、それぞれの持ち味を生かした実践が豊富になっていくことで、老健「がくさい」単独ではできないことも可能となるだろう。今回の調査から、老健「がくさい」単独で行うこと、そして、複数の施設・機関が連携する必要性が浮上した。これらの中長期的な視野で捉え、これからも地域福祉推進の拠り所となる老健を目指し邁進していきたい。

9. 経費使用明細

単位・円

調査	謝礼・14,560(ヒアリング謝礼)	17,560
視察	謝礼・8,000(あいとう福祉モール)交通費・19,033(6人)	27,033
プログラム企画	印刷費等	1,025
報告書(冊子)	印刷費等・214,704(2,000部)	214,704
打合せ・連絡	交通費等・13,420 通信費・26,200 雑費・3,724	43,344
合 計		303,666